

# 横芝の碑

(その六十三)

## 静かに開発を見つめる

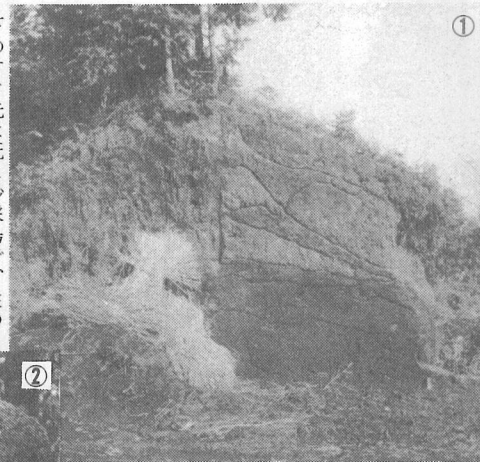
### 小堤要害城趾の石像

「勾配が急ですから気をつけて下さい、大丈夫ですか。小堤要害城趾の調査を続けている伊藤一男(町文化財審議会委員、城趾城郭の研究者)さんが私の足下を気遣ってくれました。

既に薄霜の降りたらしい城趾の山路は、余り人にも踏まれないままの落葉が積み重なってじつとりと濡れ、爪先上りの急坂がゴム長の底を滑らせます。そのうち、辺りの佇いに見覚えがある様な気がしてきたと思うと、其処は平坦な耕地になっていました。そして、正面には一本の農道が見えました。農道に出て思い出したのは、十一年程前に有線放送電話の改修工事中、小堤から木戸台に通り返けた時通ったことがあったのです。その時技術係の者にはぐれて林の中に迷い込んでしまい、気がつくとも前は高い堤に塞がれ、すぐ横には、突然現れた様な石像が建っていたので、思わず息を飲みながら慌てて堤を這い上った。という人にも話せない恥かしい記憶があるのです。

「あの時はどの辺から迷い込んで

だのかしら」等と考え、何となく彷徨っている中に「余りそちらへ行くと危いですよ」という伊藤さんの注意で気がつきますと、足



①

で発掘された土塁の断面が、昔の築城技術を誇る様に積土構造を判りと現していました。「向う側一塁の後に大分古い石が建っています。すぐ下に湧水がありますから行って見ましょう。昔の路を探していた私の心を見抜いた様な伊藤さんの言葉に「もしやあの時の石像では?」と考えが走り「では石の方を先に」とついで言ってしまったのです。

行手を遮る様に生い繁る篠や茨を押し分けて土塁を乗り越えて入った林の中は案外に明るく、一本の塔婆を背にして建っている二基の石像は確かにあの時の石像でした。立ち塞がっていた堤は、いま乗り越えてきた土塁だったのです。



②

十年前には恐くなって堤を這い上る様に傍を離れた二つの石像ですが、いま改めて傍に立ちますと何かしみじみとした再会、といった感じがして来るのでした。

石像の一基には、貞享二丑十二月廿八日、常讀信士位、九月十三日、妙香信女位、と刻まれ、別の一基には、中央に仏像、そして両側に宝永七丑四月廿五日、晁栄童子位、と刻まれています。共に丑歳の物故ということも奇しき縁念というのでしょうか。或いは一つ石に刻まれた二つの戒名の主は両親で、仏像と一緒に刻まれている戒名の主は幼くして両親の後を追った子供さんかも知れません。貞享、宝永という年号ですから、既に坂田城も小堤要害城も廃城になっていたと思います。しかし、地元の人々としては、その昔、地城を守るために、先祖が流した汗と血、そして労力を注いだ城郭は忘れることができません。

この城跡の丘に永眠の場所を求め、無病息災平穩無事祈願の場所と定めたことは当然だったと思います。地元の人々の話によりますと、小堤の氏神様は城趾の山にあつて、後で日吉神社に合祀した、ということですが、又石像の建っている辺りは寺の跡だろう、とも言っています。寺は木戸台よりにも

有りましたが、それとは別のものだという事です。いろいろ回想している中に、突然物凄いエンヂンの響きです。

驚いて伊藤さんの顔を見ますと、「砂採場がすぐ其処まできています」と教えてくれました。「随分凄いでしよう、あの真中辺りが楼台趾だったんですが、これ以上崩されると困ります、このすぐ下に城の用水といわれている湧水泉があつても清水が湧いてくるんです。こうした形で城跡に残っているのは珍らしいんです若し水脈が絶たれます」と話し続ける伊藤さんは、残念、という言葉で懸命に休んでいるようでした。

写真①は、調査員が発掘された土塁の断面で積土の構造がよく判ります。②は、親子のと思われる石像で、このすぐ後数十メートルの処まで砂採が浸入してきているのです。そして石像の正面二十メートル程の崖下に小堤要害の用水と思われる湧水泉があるのです。又石像の左側は土塁が前後に連つていて、神保長門守、三谷外記等の武將が居城した昔を伝えていきます。◎(本稿取材に当り、屋形伊藤一男さん、文中紹介の小堤神保弘明さんの御指導と御協力をいただきました。尚現場は危険な場所があるので、見学希望者は寄稿者にご連絡下さい。案内図は省略しました。文化財審議会委員小沢春光氏寄稿